第 36 回加藤周一文庫公開講読会
2023 年 6 月 17 日

「広島」

立命館大学文学研究科　落合優翼

【本章の概要】

本章は、加藤が「日米合同調査団」の一員として広島に滞在した 2 カ月間の出来事を中心に描く。加藤は中尾喜久博士の誘いをうけ「何の躊躇もなしに」広島に行くのであったが、加藤はそこで原爆によって破壊しつくされた都市と、変わり果てた広島の人々を見たのであった。加藤は医学者として、広島の人々に調査を実施するが、それは「ほとんど野蛮な行為」あった。加藤はそう自覚しつつも、「世界」を理解するために、医学的見地から被爆者に対して調査を続けたが、加藤は自らの行為に苦しみ、広島に留まるか悩んだ。しかし、それでも加藤は広島に留まることを選び、目の前の人々を「症例」に還元し、2 カ月間広島での調査活動に従事するのであった。この広島での体験は、加藤が後に医業を廃して、「文学」に進む大きなきっかけの一つとなった。

また、加藤は「日米合同調査団」の一員であった期間中、一高時代のドイツ語教室以来はじめて外国人と出会い、様々な場面において彼らとの文化の違いを実感するのであった。また、「L 中尉」（ロッジ中尉）と共にジープに乗り、広島各地に散らばった被爆者の追跡調査を実施するのであった。その道中、加藤はロッジ中尉と「日本帝国」下における「民主主義」について議論を行うなかで、加藤の「日本帝国」に対する姿勢は「裏切り」ではないかとロッジに指摘され、たじろいだのであった。

広島で様々な経験をした加藤は、疲れていた。そして、「その後長い間」広島を考えることはせず、自身の広島経験を初めて公に語ったのが『朝日ジャーナル』（1967 年）の『続　羊の歌』「広島」の章であった。

【第 1 段落】広島と広島市民（1）

広島には一本の緑の樹さえもなかった。見わたすかぎり瓦礫の野原が拡り、その平坦な表面を縦横の道路と掘割の水が区切っていた。石造の建物がいくつか、崩れ落ちずに立っていたが、その窓は破れ、壁は半ば崩れて、近づくと建物を透して向う側の青空が見えた。人の住むことのできる家は一軒もなく、しかし、その焼け野原には影のようにいつも誰かが彷っていた。国民服の男の埃に汚れた顔は、放心して現ないようにみえた。子供たちの顔は、火傷の瘢痕にひきつり、髪の抜けた女は、風呂敷で頬かぶりをして、太陽の下を逃げるように歩いていた。爆心から遠く破壊を免れた郊外の病院には、まだ病人があふれていて、歯ぐきを腫らし、傷口から膿を流し、高熱に昼も夜も苦しんでいた。それが二ヵ月まえでは広島市民であった人々の生きのこりであった。

① 「広島には一本の樹さえもなかった。……いつも誰かが彷っていた。」

・原爆で廃墟となった広島をみた加藤。この段落では、なぜ広島が廃墟となったのか、なぜ加藤が広島に来たのかは、まだ語られていない。

・後に加藤は、「私たちが広島に入った時には、死骸などはほとんど片付けられていたのですが、それは前にもなくて後にもない異常な特殊な光景だったとしか言いようがありません。というのは、爆風と火事の両方の原因によって完全に平らになっており、川と道だけがあって、あとは瓦礫しかないという不思議な光景。[1]」と語っている。

② 「人の住むことのできる家は一軒もなく、……昼も夜も苦しんでいた。」

・具体的な被爆者の描写。加藤がみた広島市民たちは、原爆で傷つき、原爆投下から 2 か月がたった今も苦しんでいた。

【第 2 段落】広島と広島市民（2）

一九四五年八月六日の朝まで、そこには、広島市があり、爆撃を受けなかった城下町の軒並みがあり、何万もの家庭があって、身のまわりの小さなよろこびや悲しみや後悔や希望があったのだ。その朝突然、広島市は消えて失くなり、市街の中心部に住んでいた人々の大部分は、崩れた家の下敷になり、掘割にとびこんで溺れ、爆風に叩きつけられて、その場で死んだ。生きのびた人々は、空を蔽う黒煙と地に逆まく火焔の間を郊外へ向って逃がれようとして、あるいは途中で倒れ、あるいは安全な場所に辿り着くと同時に死んだ。さらに生きのびた人々も、田舎の親類家族と抱合い、九死に一生を得たよろこびを頒つと思う間もなく三週間か四週間の後には、髪の毛を失い、鼻や口から血を流し、やがて高熱を発して、医療の手もまわらぬままで死んでいった。それから二ヵ月、辛うじて難を免れた人々は、親兄弟を失って呆然とし、みずからも「原爆症」の恐怖に怯えて、追いたてられた獣のように、あてもなく焼け野原を歩いていた。もはやそれは嘗ての広島市民とは別の人間であり、あたかもそのことが無かったかのように、彼らが以前の人間にたち戻ることはできないだろうと思われた。

① 「一九四五年八月六日の朝まで、……後悔や希望があったのだ。」

・1941 年末の広島市民は 41 万 3889 人であったが、戦争の長期化に伴い人口が減少。1945

[1] 加藤周一「ヒロシマ、アメリカ、そしてナショナリズム」『二〇世紀の自画像』筑摩書房、2005 年、110 頁。

年 6 月末の米穀配給登録人口は 24 万 5423 人であり[2]、原爆投下時の広島市には居住者、軍人、通勤等による入市者を含めると 35 万人ほどがいた[3]。

・1945 年 4 月、連合軍の上陸によって本土が分断された場合に備え、東日本の諸軍を統括する第 1 総軍（司令部：東京）と西日本の諸軍を統括する第 2 総軍（司令部：広島）が設置された。また、宇品には陸軍の船舶輸送作戦の業務を遂行する、船舶司令部が設置されていた[4]。

・広島市は陸軍の重要機能を備えた軍都であったが、1945 年 8 月 6 日の朝まで連合国からの爆撃を受けていなかった。一方、鎮守府・海軍工廠があった呉などは連合国軍の爆撃によって破壊されていた。

② 「その朝突然、広島市は消えて失くなり、……死んでいった。」

・1945 年 8 月 6 日の朝、1 発の原子爆弾が 1 機の B-29 爆撃機によって投下された。原爆 1 発のエネルギーは、TNT 火薬約 13 キロトン。B-29 爆撃機 1 機あたり、5 トン分の爆弾が積載されおり、原爆 1 発の威力＝B-29 爆撃機 2600 機分の爆弾であった[5]。

・正確な原爆による死者数は不明だが、1945 年 12 月末までに約 14 万人が亡くなったと推定される[6]。その中には、朝鮮・ドイツ・ロシア・東南アジア諸国・中国・モンゴル・米国生まれの日系人・米軍捕虜も含まれていた[7]。

・爆風による被害（爆心地での最大風速は 440 メートル/秒）であり、爆心地から 500m 以内は強固な鉄骨建造物が破壊され、2 キロメートル以遠の木造家屋は倒壊した[8]。

・爆風から生き残った人々は、原爆の熱線と爆風による火事に襲われた。原爆の爆発後 30 分頃から午後 3 時すぎまで、火事嵐が発生。広島市の総戸数 68%が全焼・全壊し、24%が半焼・半壊以上の被害が生じた[9]。

・原爆から生き延びた人々は、被爆した直後から数カ月の間にあらわれる急性放射線症による、下痢、血液細胞数の減少、出血、脱毛などの症状に苦しめられた[10]。

---

[2] 広島県『広島県史　近代 2』1981 年、1036 頁。
[3] Ⅰ 軍都広島の歩み国際平和拠点ひろしま～核兵器のない世界平和に向けて～ (hiroshimaforpeace.com) （最終閲覧日：2023 年 6 月 15 日）
[4] Ⅰ 軍都広島の歩み国際平和拠点ひろしま～核兵器のない世界平和に向けて～ (hiroshimaforpeace.com) （最終閲覧日：2023 年 6 月 15 日）
[5] 前掲『広島県史　近代 2』1044 頁。
[6] 死者数について - 広島市公式ホームページ｜国際平和文化都市（hiroshima.lg.jp）（最終閲覧日：2023 年 6 月 15 日）
[7] 前掲『広島県史　近代 2』1040 頁。
[8] 同前、1045 頁。
[9] 同前。
[10] 急性放射線症 - 公益財団法人 放射線影響研究所 RERF（最終閲覧日：2023 年 6 月 15 日）

③ 「それから二ヵ月…できないだろうと思われた。」

・原爆で肉親を失い、「原爆症」の恐怖に怯える広島市民は、「追いたてられた獣のように」加藤の目に映り、彼らは嘗ての広島市民とは別の人間であり、元の人間に戻ることはないように思われた。
→加藤は、広島市民にとっての原爆経験が、人間を変えてしまうほど大きなものと捉えていた。

【参考資料】被爆前後の広島市内の様子（PowerPoint 共有）

【第 3 段落】超え難い無限の距離

みずからその経験を通ってきた人たちは、どうしてもその話をしたがらなかった。「ここでは《ピカドン》といってますけどねえ、生きた心地もしなくて……」といったまま、口をつぐんでしまう。そういうときほど、相手と私自身との間に、私が超え難い無限の距離を感じたことはなかった。経験の大きな黒い塊が、相手の人間のまん中に、動かすべからざるものとしてあり、しかし当人さえもそれを言葉であらわすことができなかったとすれば、どうして私にそれを理解することができたろうか。理解を越えたもの、すなわちそこから意味を抽きだした瞬間に、その意味の直ちにいろ褪せるもの、しかしそれと向きあっている限り人間の全体を抗し難く規定してやまぬもの……私はそれを経験しなかった。しかし経験した人々を見たのである。広島についてのすべての言葉は、それがどれほど納得できるものであっても、聞く度に私に「ああ、それはちがう、どこかがちがう」という気をおこさせた。私のなかの何かが、「その通りだが、しかしそれだけではないだろう」と呟いた。あの《ノー・モア・ヒロシマ》という言葉でさえもがだ。私は広島を見たときに、将来の核兵器については何も考えていなかった。後になって、核兵器についても考えるようになったが、そういう私自身の考えと、広島の人々を沈黙させた経験との間に横たわる遥かに遠い距離を、私はいつもくり返して想い出したのである。

① 「みずからその経験を通ってきた人たちは、……経験した人々を見たのである。」

・原爆＝《ピカドン》を経験した人々は、その話をしようとしなかった。なぜか？

・鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』（2018 年）の整理
⑴重い経験、あるいは前代未聞の経験は、過去に意味を付与されたどんな言葉および言葉遣いをもってしても表現しきれない。
⑵その重い経験を自分が乗りこえないと語ることはできない。自分なりにその経験につ

いて整理し、客観的に見られない限りみずから語ることはできない。

⑶重い経験は、自分の経験であって、どう表現したところで自分以外の人間には伝わらない、という意識が生じる。

→語ろうとする者は聴こうとする者に対して、聴こうとする者も語ろうとする者に対して、「超え難い無限の距離」を感じることになる[11]。

・加藤は原爆で傷を負い、大量の放射線を浴びることはなかった。また、大量の焼死体や溺死体を見て、その死臭を嗅ぐことはなかった。呻き苦しみ、死んでいく人々の声を聞かなかった。加藤は、原爆投下後の地獄と化した広島を自らの体で経験しなかった。しかし、地獄を経験し生き延びた人々を見たのだった。

② 「広島についてのすべての言葉は、……言葉でさえもがだ。」

・加藤が「広島についてのすべての言葉」や「《ノー・モア・ヒロシマ》という言葉」に違和感を覚えたのはなぜか？

⑴ 政治的現象としての原爆投下[12]

「広島の惨禍を知るだけに留まっているかぎりは、「ノー・モア・ヒロシマ」に寄与しない。どういう状況のもとで、どういうものの考え方に基づいて、原爆使用が決定されたかを知らなければならない、と考えていたからである。[13]」

⑵ 個人が消し去られることへの違和感

・『二〇世紀の自画像』における加藤の発言

「政治を語る時、ただちに個人の顔でなく人間を数字に還元して、統計の問題にします。本来、たとえ一人の人間を殺すのでもたいへんな問題で、数字に還元できない。しかし数字に還元しなければ、政治の話ができない。私にはその違和感がある。

これは政治に限らず、客観的な医学問題・社会問題を扱うのにも統計が出てきます。たとえば医学では「症例」という。「症例」という概念は、固有名詞の消去です。いちいち固有名詞を言っていたんじゃ医学的習熟ができないし、科学が成り立たない。

科学といい、統計という発想の中には、個人を消去して特定のカテゴリーの中の番号に還元してしまうものの考え方が内在している。それは残酷です。私はそこにこだわるのです。私がしばらく原爆の話をしなかった理由の一つは、そういうことと関係しています。[14]」

---

[11] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』岩波書店、2018 年、308 頁。
[12] 加藤は「原爆はまた政治的現象でもあるわけで、私は後になると政治的現象としても考えました」と語っている。（加藤周一『二〇世紀の自画像』113 頁。）
[13] 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』308, 309 頁。
[14] 加藤周一「ヒロシマ、アメリカ、そしてナショナリズム」『二〇世紀の自画像』筑摩書房、2005 年、1106, 117 頁。

・納得できる広島についてのすべての言葉→具体的にどのような言葉なのかは不明だが、原爆による広島の被害を客観的に示す言葉などを指すか？

例：どれほどの爆風・熱線で建物が破壊され、約何人の人が死に、放射線の後遺症に苦しんでいる人々が約何人いるか。

→被爆した一人の人間は数字に還元され、個人の経験の意味が失われてしまう。

《ノー・モア・ヒロシマ》においては、被爆者個々人の経験が、《ヒロシマ》という大きな主語/政治運動のスローガンに回収され、個人の経験が消える

・2005 年段階において、加藤は「広島についてのすべての言葉」に対する違和感を、明確に言語化し、分類できる段階にあった。
しかし、『続　羊の歌』を執筆した段階では、その違和感を明確に言語化できてはいなかった

③　「私は広島を見たときに、……私はいつもくり返して想い出したのである。」

・加藤の核兵器にたいする考え（観念）と「広島の人々を沈黙させた経験」との間には「遥かに遠い距離」が存在。

・広島では、被爆経験を持った広島の人々と、その経験を持たない加藤との間には「超え難い無限の距離」を感じた

・前章の「信条」では、「私はそこで「経験」をもった人間に出会うだろうし、「観念」の無限の強みと弱みとを知るだろう[15]」と結んだ
→加藤は広島で「経験」の重さと「観念」の弱さを知るのであった[16]

【第 4・5 段落】広島の「症例」

しかし眼のまえの患者と医者との間の沈黙は破らなければならなかった。言葉であらわせることを言葉であらわし、その意味を見つけ、そうすることで、その人にとっての経験を、私の観察し分類することのできる対象に変えなければならない。

「そのときあなたは何処にいましたか」と私はいった。

「姉の亭主が出征していましたから、姉の家で……」。

「お姉さんの家は、この地図の上でいえば、どの辺に当りますか。 ……なるほど、爆心から三粁ぐらい……家は木造ですね、その中で、あなたはどちらを向いていましたか」。

[15] 加藤周一『続　羊の歌』改訂版、岩波書店、2014 年、13 頁（初版 1968 年）。
[16] 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』308 頁。

そういう質問は、その人にとって、あきらかに、どっちでもよいことにすぎなかったろう。そういう質問を、広島の被害者に浴びせるのは、ほとんど野蕃な行為である、と私は感じていた―家が木造であろうとなかろうと、姉の子供は死に、姉の眼はみえなくなり、その人の人生は変ったのである。いうべからざる経験が一方にあり、当人の人生にとっては何の関係もない事実が他方にある。しかし世界を理解するためには、一個の人生を決定するだろういうべからざる経験ではなくて、言葉に翻訳することのできる事実を言葉に翻訳することが、必要なのである。もし広島が私に教えたことがあるとすれば、それは、その対照がどれほど激しく、どれほど堪え難いものにまでなり得るかということであったろう。すなわち私は、黙って東京へ帰るか、留って広島の「症例」 を観察するか、そのどちらかを選ぶほかはなかった。 広島の「症例」ではなく、広島の人間を眼のまえにして、私には言うこともなく、また為ることもなく、そもそもそこに長く留る理由もなかった。私は留った。故に人間を症例に還元し実験室の仕事に専心したのである。爆心からの距離、遮蔽物の有無とその性質、原爆症に典型的とされる脱毛その他の症状、殊に血液像、また殊に骨髄塗抹標本の所見……私はそういうことを考え、いくさや、いくさに伴う道義上の問題や、人間にとっての核兵器の意味というようなことについては、ほとんど何も考えなかった。骨髄塗抹標本は、広島の症例に係り、核兵器の意味は、広島の人間に係るだろう。広島の二ヵ月間ほど、私が原爆投下ということについて、考えなかったことはない。

① 「いうべからざる経験が一方にあり、……必要なのである。」

・「いうべからざる経験」…姉の子供が死に、姉の眼はみえなくなる→人生を変える経験

⇕

「人生にとっては何の関係もない事実」…爆心地からの距離、遮蔽物の有無等

・「世界を理解するためには」＝科学的に世界を理解するためには、個人の重要な経験ではなく、客観的事実を言葉で科学的に記述する必要がある。

② 「もし広島が私に教えたこと、……考えなかったことはない。」

・科学的に＝医学的に広島への原爆投下の影響を理解するために、加藤は広島の人々を「症例」に還元し観察をした。→「いちいち固有名詞を言ってたんじゃ医学的習熟ができないし、科学が成り立たない[17]。」

・目の前にいる一人の「人間」を「症例」に還元することは、「堪え難いもの」であり、広島に「長く留まる理由もなかった」。しかし、加藤は広島に留まった。

[17] 加藤前掲『二〇世紀の自画像』116 頁。

○なぜ、加藤は広島に留まったのか？

・医業を廃する覚悟をもたない限りは「広島に行かない」選択肢や、ひとり「東京へ帰る」選択肢はなかったろう。ゆえに「私は留まった」というよりも「留まざるを得なかった」[18]

・医者/科学者として広島に留まった加藤だが、医学や科学のみで人間の全て、人間が生きる世界の全てを理解することはできない。

→この広島体験は、後の「科学と文学」といった論考に結実する考えのきっかけの一つ[19]

・広島での体験は、後に加藤が「文学」に進む重要な契機の一つとなった

鷲巣（2018）

「観察者でありつづけ、観察者としての自負をもっていた加藤だが、広島では観察者にさえなれないことを強く実感した。広島の体験は加藤にとって重かった。のちに加藤は医業を廃することになるが、その理由のひとつは、間違いなく「広島体験」にあった、と私は考える。[20]」

小森陽一・成田龍一（2009）

「自分が原爆の被害の調査に行ったときに、専門化として認識したことについては、もちろんアメリカ軍の調査団に同行したから公表もできないし、専門の言葉で語りうるのは世界中でごく限られた人しかいない。そこを突破するにはどうしたらいいのか。その時に自分は、広い意味での文学という表現を選んだのだと。そのあたりに、私は加藤周一が自分の文学的出発に極めて自覚的であったということを強く感じたのです。[21]」

→加藤は広島で「世界」を理解するために、専門分野の言葉で広島を記述したが、その言葉が通じるのは、一部の専門家達だけであった。その問題を突破するため、加藤は「広い意味での文学」を「世界」を理解し語るための方法として選んだ。

・加藤周一と垣花秀武の対談（1967 年）

「それから、こういうこともあります。科学とは、つまるところ、最も信頼度の高い知識の体系である。どうしても知識の問題に関しては、より科学的になるほかはない。そこで残る問題は、知識じゃなくて、意思とか、価値の問題でしょう。そういうことが専門化した科学的知識の一種の総合という課題の次に出て来るほかないと思います。専門化された科学的知識を価値に結びつける仕事は、文学者の仕事です。これは万人の仕事である。文学者は専門化ではないから、万人の仕事を洗練するのです。文学者とは、非専攻的であることの専門家である。[22]」

---

[18] 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』310 頁。
[19] 同前。
[20] 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』311 頁。
[21] 小森陽一・成田龍一「加藤周一を読むために」『現代思想』37(9)、2009 年 73 頁。
[22] 加藤周一、垣花秀武前掲「科学と文学の間」212 頁。

→専門化した科学的知識を総合し、価値や意思の問題に結びつける必要がある。その仕事を担うのが、「非専攻的であることの専門家」である文学者。

・広島にいた加藤は、原爆投下と人間の関係については考えず、「原爆症」や「骨髄塗抹標本の所見」といった、科学的知識に属する問題を考えていた。

【第 6 段落】なぜ、広島に行ったのか

そのとき私は、東京帝国大学の医学部と米国の軍医団が共同で広島へ送った「原子爆弾影響合同調査団」に、日本側から参加していた。日本側の参加者を組織したのは、外科の都築教授であった。都築教授は、血液学者の中尾博士に相談をした。 それより早く中尾博士のところへは、広島の病院から血液塗抹標本が送られて来ていたので、私もその標本を検査していた。その所見は、それまで「再生不良性貧血」として記載されていた病変に似ていて、患者の骨髄に大きな変化を想像させるものであった。 何がそこでおこったのか。私たちはすでにそのことを議論していたし、骨髄の標本をもっと広く知りたいという強い願いももっていた。それで中尾博士に広島へ同行しないかといわれたとき、私は何の躊躇もなしにその仕事を引きうけたのである。

・都築正男（つづきまさお）（1892－1961）

原爆症や熱傷研究の専門家、「原爆症研究の父」と呼ばれる。広島・長崎の被爆者の診察・調査を行い、後にはビキニ環礁で被爆した第五福竜丸乗組員の診察・調査も行う[23]。

・中尾喜久（なかおきく）（1912-2001）

群馬大教授などをへて,昭和 38 年東大教授。47 年自治医大学長。辺地医療にしたがう医師の育成,地域医療の充実に尽力。医療審議会会長などをつとめた[24]。

① 「そのとき私は、……日本側から参加していた。」

・ようやく、なぜ加藤が広島に来ていたのかが語られる。加藤は、東京帝国大学医学部と米軍軍医団の合同による、「原子爆弾影響合同調査団」に、日本側から参加。

・1945 年 9 月 14 日に学術研究会議を基盤として、「原子爆弾災害調査研究特別委員会」が設置され、それを吸収する形で「原子爆弾影響日米合同調査団」が組織された[25]。

・10 月 15 日～11 月 20 日まで、爆心地から 5km の住民に対して診療・調査が実施され、合計 5120 名が対象となった。[26]

---

[23]鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』301 頁。

[24] なかお-きく【中尾喜久】 | 日本人名大辞典（japanknowledge.com）（最終閲覧日：2023 年 6 月 15 日）

[25] 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』301、303 頁。

[26] 東京帝国大学医学部診療班　梶谷鐶、羽田野茂編「原子爆弾災害調査報告（広島）」大滝英

② 「何がそこでおこったのか。……躊躇もなしにその仕事を引きうけたのである。」

・なぜ加藤は広島に行くことを選んだのか。

⑴ 広島の病院から送られた血液塗抹標本を検査して、「骨髄の標本をもっと広く知りたいという強い願いももっていた」
→科学者としての知的好奇心？「知識の体系自体の欲求に従って、それを完璧化するという動機[27]」

⑵ 副手であった加藤には、合同調査団に加わる以外の選択肢は殆どなかった。しかし、「何の躊躇もなしに」と書いたのは、合同調査団の設立の経緯を後に知り、調査団に加わったことに対する忸怩たる思いがあったのだろう[28]

・『二〇世紀の自画像』で語った参加の理由

・アメリカ＝ファシズムからの解放者という側面。「そういう雰囲気の中で、私は広島に行きました。なぜアメリカに協力したのかということについては、後でいろいろと考えが変わってくるのですが、当時は私にとっても解放軍という面が強く感じられました。[29]」→解放軍への協力。

【第 7・8 段落】外国人との出会い

「合同調査団」が広島へ出発するまえに、早くも米国側の専門家は、私たちの内科教室に現れ、中尾博士の症例を調べはじめていた。彼らは毎日通って来て、病歴を筆写したり、私たちと一しょに標本を顕微鏡で覗いたりした。顕微鏡のまえに坐ると、中尾博士の実力はたちまち現れる。米国側の若い医者は、顕微鏡を覗きながら、分類の困難な細胞に出会うと、中尾さんの診断をもとめた。その度に礼をいう彼らの態度は丁重で、粗野なところが全くなかった。しかし話は、ほとんど全く通じなかった。「おい、ちょっと聞いてくれ」と中尾さんは、私の机の方へ向って怒鳴った、「どうもさっきから何か訊かれているんだが、何のことだかわからない」。それで私が傍へ行くと、米国人は渡りに舟という面持ちで、早口に質問をくり返す。しかしその意味は、私にもわからない。 相手は当惑し、互いに顔を見合わせ、一人がもう一度、ゆっくりと噛んで含めるように前の質問をくり返す。それが要するに、便所はどこかということであったとわかるに及んで、私たちは大笑いをした。「それならそうと、はっ

征解題『原子爆弾災害調査報告　第 3 冊』不二出版、2011 年、522 頁。

[27] 対談〉加藤周一、垣花秀武「科学と文学の間」『中央公論』82（8)、1967 年 7 月、205 頁。

[28] 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』303 頁。

[29] 加藤前掲『二〇世紀の自画像』109 頁。

きりいえばいいのに」と中尾さんはいった、「あんな廻りくどい言い方をするから、おれたちにはわからない」。

私はそのとき、高等学校のドイツ語教室以来、はじめて外国人と出会った。その出会いは、占領軍と被占領国民との接触という枠のなかで、また血液学上の技術問題という極度に専門化された領域のなかで、おこった。その領域からはみ出したところで、米国側と交渉していたのは、都築教授である。都築教授は、「合同調査団」の目的は純粋に学問的なものである、と説明し、私たちに広島行きの具体的な予定を説明した。米軍の輸送機が、医療器具や、食糧や、車輛と共に、私たちを、立川から広島まではこんだ。

①　「「おい、ちょっと聞いてくれ」……おれたちにはわからない」。」

・トイレの場所を尋ねるアメリカ人、しかしその尋ね方は回りくどく、日本人には分かりにくいものであった
　→異なる文化的背景を持つ外国人と接触し、文化の違いを実感

②　「私はそのとき、高等学校のドイツ語教室以来…領域のなかで、おこった。」

・戦争中に、中国大陸や南方地域に兵士として送られなかった加藤は、被占領地民や敵国兵士の外国人とは出会わなかった
・敗戦後に、占領軍と被占領国民という枠組み＋血液学上の技術問題という極度に専門化された領域の中で、「高等学校のドイツ語教室以来、はじめて外国人と出会った。」
　一高時代には、ドイツ語教師のペツォルト教授に出会っていた（『羊の歌』「戯画」）。

③　「都築教授は、「合同調査団」の目的は……立川から広島まではこんだ。」

・都築教授から「合同調査団」の目的は「純粋に学問的なものである」との説明を受け、加藤は米軍の輸送機に乗って、立川から広島に移動。

【第 9 段落】日本軍と米軍の違い

占領軍との、私にとっては最初の、そしてまた最後の、この接触はそれは接触というほどのものではなかったが、事毎に私をおどろかせた。立川からの輸送機の内側には、米国人が《ピン・アップ》と称する裸の女の途方もなく大きな写真が貼りつけてあって、そのまえに童顔の若い兵士が銃をもって坐っていた。日本の陸軍ならばもちろん裸の女そのものに関心のないはずはなかったがそういう写真を軍用機の内側に公然と貼りつけることはしなかったろう。日本の軍隊には、たてまえとしての、禁欲的

精神主義があり、そのたてまえは、いくさを戦うために大切なことであると考えられていた。米国側の調査団を率いていたＭ軍医大佐は、南加州大学の教授で、ビーヴァリ・ヒルズで開業し、著名な患者を沢山診ていた。いくらかフランス語を話し、ときどき警句を吐いた。広島の上空を飛ぶ爆撃機の編隊を指して、「彼らがナチスを破壊したのだ」といったことがある。私はまだドイツを知らず、ドレスデンの絨緞爆撃で何万人が死んだのかも知らず、ただそのときの爆撃機 B25 の内部にも《ピン・アップ》の写真が飾ってあったのだろうか、と考えていた。Ｍ大佐ばかりでなく、優れた病理学者で、イェイル大学から来ていたＬ中佐も、本来の軍医ではなかった。彼らはいくさがはじまってから従軍し、大佐や中佐の待遇を受けて、軍隊のなかでも、それぞれ専門家としての能力を発揮していたのであろう。私は学者として教室全体の尊敬をあつめていた沖中助教授が、 いくさの末期に、看護卒として召集されたことを想い出さないわけにゆかなかった。「看護卒というのは、病室の廊下を掃除したりするのだからね」と教室の誰かがいった、「沖中さんの指導をうけた軍医が、まさか、廊下掃除の命令も出せないだろう……」。

・Ｍ軍医大佐

ヴァ―ン・R・メイスン（Verne R. Mason）南カリフォルニア大学臨床医学教授[30]

・Ｌ中佐

アヴリル・A・リーボウ（Averill A. Liebow）イェール大学臨床医学助教授[31]

①　「占領軍との、私にとっては最初の、……大切なことであると考えられていた。」

・加藤にとって最初で最後の、占領軍との接触＝異文化接触は驚きに満ちたものであった
・従軍経験のない加藤は、想像上の日本軍の文化と、自身の眼で見た米軍の文化を比較
・性欲に対する米軍と日本軍のスタンスの違い

米　軍…輸送機の中には《ピン・アップ》という裸の女性の大きな写真が貼り付け
　　→いくさを戦うには性欲が必要？

日本軍…建前としての「禁欲的精神主義」
　　→いくさを戦うには大切なことであり、いくさに性欲は不要

②　「米国側の調査団を率いていたＭ軍医大佐は、……出せないだろう……」。」

・米軍と日本軍における専門家の待遇の違い

米　軍…Ｍ大佐・Ｌ中佐は本来の軍医ではなかったが、従軍して大佐・中佐として待遇

[30] 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』305 頁。
[31] 同前。

軍隊内で専門家として能力を発揮

日本軍…沖中茂雄助教授が「看護卒」で招集された噂[32]。沖中助教授は、自律神経系の研

究者で、神経内科という分野を確立した内科学の権威[33]。

看護卒の仕事は、廊下掃除など→専門家としての能力を発揮できない

→日本の軍隊内では、兵士の扱いはその社会的地位とは一切無関係で、軍隊内の階級に従う「一種の平等主義」が存在[34]

【第 10 段落】「しかし、それが人生さ」

秋晴れの空の高い日に、私はM大佐のジープで、広島から岩国の海軍病院を訪ねたことがある。私は久しぶりで実験室の薬品の匂の代りに、潮の香を含んだ風をかいだ。紺青の瀬戸内海には、爆撃で沈められた日本海軍の艦船が岸にちかく、その残骸をさらしていた。路上には占領軍の兵士が立って、通りすぎる車に同乗をもとめる相図をしていた。往来の車は、乗用車も、貨物の車も、ジープも、すべて米軍のものばかりで、土地の車は荷車さえもみられなかった。二人連れの若い兵士のまえで、M大佐がジープを停め、「どこへ行くのか」と訊くと、兵士は直立不動の姿勢で、敬礼し、「慰安所」に行きたいのだと答えた。「それならば、後の席に乗れ」―彼らが降りるまで、大佐は冗談をいって兵士を笑わせ、 無駄口を叩きつづけて上機げんであった。「そこに日本の娘は何人位いるのか……」。日本陸軍の大佐も、どこかの占領地で、兵士を自分の車に乗せ「慰安所」まで送ってやることがあったのだろうか、と私は考え、彼らが降りて行ったあと、M大佐が口笛で吹く歌劇《お蝶夫人》の一節を聞きながら、 どうしても陽気な気分になれない自分を感じていた。「売春という事業は、陽気なものではない」と私は呟いた。それは必ずしも私の考えていたことのすべてではなかった。「しかし、それが人生さ」とM大佐は、 フランス語で、相変らず陽気に答えた。

① 「秋晴れの空の高い日に、……海軍病院を訪ねたことがある。」

・「岩国の海軍病院」…山口県岩国市にあった病院、1942 年 10 月に岩国海軍病院として開院（現在は国立病院機構岩国医療センター）。

1945 年 8 月 7 日以降、同病院の院長は、軍医・看護婦・衛生兵を広島に派遣し、被爆者

[32] 沖中助教授は、軍医予備制度に志願し海軍軍医少尉として、8 月 15 日に召集された。（鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』306 頁。）
[33] 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』305,306 頁。
[34] 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』306 頁。

を同病院に運んだ[35]

・日本学術会議編『原子爆弾災害調査報告書』（初版：1951 年発行）に、加藤が調査に関わった「原子爆弾放射線病の血液学的研究」の報告書がある。
同報告書には、「早期症例」として岩国海軍病院で観察された 9 例を、「幸いに当病院の好意によりその病歴ならびに血液塗抹標本を借用し、検索しえた[36]」とある。
→おそらく、この章は岩国海軍病院に血液塗抹標本を借用しに行った時の出来事を書いたものか

② 「M 大佐がジープを停め、……陽気な気分になれない自分を感じていた。」

・「慰安所」…占領軍兵士のために日本政府によって設置された買売春施設
橋本政実内務省警保局長名によって「外国駐屯地に於る慰安施設について」が、1945 年 8 月 18 日に各府県長官に無電通報された。
買売春の取締にあたってきた当局が、率先して買売春施設を設置することを指令[37]

・米　軍…「慰安所」に行くために同乗を求める兵士、求めに応じて兵士を同乗させ、買売春施設まで送り届ける上官
日本軍…日本軍の大佐も、占領地で兵士を自分の車に乗せて、「慰安所」に送っていたのだろうか？
従軍経験のない加藤には、日本軍の実態はわからない。「送ってやることがあったのだろうか」という表現。「送ってやっていたのだろう」などの表現をしていない。
→日本とアメリカの性に対する態度の違い、日米の文化の違いを意識

・歌劇《お蝶婦人》の一節を口笛で吹く M 大佐。
《お蝶婦人》＝《蝶々夫人》…米軍海軍士官ピンカートンと国際結婚した、長崎の芸者蝶々さんの悲劇を描く。
→実際に M 大佐が口笛で《お蝶婦人》の一節を吹いていたのかは不明
「慰安所」で働く一部の女性たちの未来を暗示？

③ 「「売春という事業は、陽気なものではない」……相変らず陽気に答えた。」

・加　藤…「売春という事業は、陽気なものではない」（考えのすべてではない）
M 大佐…「しかし、それが人生さ」（C’est la vie）＝「仕方ないさ」[38]
→売春に対する認識においても、加藤は文化の違いを意識

---

[35] 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』312 頁。
[36] 東京帝国大学医学部佐々内科教室（主任教授　佐々貫之）「原子爆弾放射線病の血液学的研究」大滝英征解題『原子爆弾災害調査報告　第 3 冊』不二出版、2011 年 649 頁。
[37] 早川紀代「占領軍兵士の慰安と買売春制の再編」、恵泉女学園大学平和文化研究所『占領と制―政策・実態・表象』インパクト出版会、2007 年、48,49 頁。
[38] 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』312 頁。